

兵庫県道徳副読本

小学校3・4年

心がつむぐ兵庫のきずな

心 きこらめく

心 きらめく 目次

オオムラサキのたん生	1
近松の里をめざして	7
ガスの工事にきたお兄ちゃん	11
但馬に牛を―前田周助―	13
神戸の水	18
オサムシくん―手塚治虫―	23
いつまでもわすれない	26
愛のひと―野口ゆか―	28
そろばんづくり―小野のそろばん―	32
風の学校―中田正―	37
ぼくたちにできること	41
いつか必ず役に立つ―大上宇―	42
ぼくの町のたからもの―平之荘能舞台―	46
ぼくは一人じゃない	50
ここは山田錦のふるさと―藤川禎次―	52
わたしの雪彦山	58

オオムラサキのたん生

「あつ。」

たいき君とこうた君は、思わずさげびました。いつものように早めに学校に来て、校庭にあるし
育しゃに行き、オオムラサキのさなぎを見たときのことでした。白っぽい色のさなぎのせ中がわれ、
オオムラサキの黒いせ中があらわれたのです。二人は声も出せずに、目と口を大きく開いたままそ
の様子を見守りました。

わずか三分間ほどで体全体が出てきたとき、二人はわれに返って、
「先生、たいへんや！」

とさげびながら、あわててたん生んの木下先生をよびに行きました。

お昼休みに、クラスのみんなでし育しゃを取り囲みながら、たいき君は、これまでの出来事を思
い出していました。

「国ちょう、つまり日本の国のちょうちよは何か、知っていますか。」

木下先生が、たずねました。

「同じ『こくちょう』でも、鳥ならキジやな。」

鳥はかせの大森さんがつぶやきました。

「正かいは、オオムラサキです。」

木下先生はそう言いながら、大きくはねを広げたオオムラサキの写真を黒板にはりました。

「この美しいちょうは、昔は、わたしたちの学校の周りにたくさん飛んでいたんですよ。でも、今はその数も少なくなつて、ぜつめつしそうなんですよ。」

「えっ、ほんと。何とかならないかな。」

「見てみたいな。さがしてみようよ。」

「わたしたちの学校にオオムラサキを飛ばそうよ。」

みんな口々に言いました。

こうして、三年一組の「オオムラサキを飛ばそう」という計画がスタートしました。

みんなは、さっそくオオムラサキのよう虫を見つけるためにエノキのあるぞう木林に出かけました。エノキの葉のうらを一まい一まいていねいに見ていきました。しかし、何時間もさがしましたが、一ぴきのよう虫も見つかりません。

「やっぱり、ぜつめつしてしまっただんかな。」

「そうやな。オオムラサキを飛ばそうなんて、無理やっただんやわ。」

次の日、みんながっかりしているところへ、兵庫県立丹波の森公苑の足立先生が、育てているよう虫を八ひき持ってきてくれました。

「きみたちが、さがしているのは、これかな。たんじんの先生から聞いてね。」

「わあ、やった。これで、オオムラサキが見られるね。」

「でも、こんな小さなよう虫が、本当にオオムラサキになるのかな。」

二センチくらいのような虫を見て、たいき君は思わず言いました。

「だいじょうぶだよ。大事に育ててね。」

足立先生はやさしく声をかけてくれました。

校庭にあるエノキの木の葉によう虫を放しながら、みんなは、

「よう虫君、がんばれよ。」

「どうか、ぶじに育ちますように。」

と、いのるように言いました。

それからというもの、たいき君たちは、よう虫のことが気になってしかたありません。休み時間

にも、給食を食べたあとにも、すぐに様子を見に行きました。

「葉っぱをいっぱい食べてどんどん大きくなるね。もっと大きくなれよ。」

「きれいなちょうになるのが楽しみやな。」

観察日記を書きながら、たいき君とこうた君は顔を見合わせてにつこりしました。

数回のだつ皮をくり返したあと、よう虫の色が少しとう明できれいな青緑に変わりました。そして、七センチほどあった大きさが四センチほどにちぢんで、さなぎになっていました。みんなでエノキの葉のうらにくつついたさなぎを、校庭のし育しゃに入れました。

「たいき君、観察日記はどうしたの。」

何も書いてないページが三日間続いているたいき君の観察日記を手にとって、先生が言いました。

「さなぎになってから動かなくなつて、かかれてるみたいで。見に行つてもな……。」

先生は、たいき君をし育しゃにつれて行きました。

「たいき君、さなぎにそつとふれてごらん。」

先生が、さなぎがぶらさがっているエノキの葉をたいき君にさし出しました。おそろおそろたいき君が指でふれたしゅん間、

「ブルツ、ブル、ブルツ。」

さなぎは、はげしくふるえました。

「うわあ、びっくりした！ 動いた、動いた！ 生きてるんや！」

「さなぎを食べにくるアリをふり落とすために、ふるえるんだよ。」

先生が教えてくれました。

たいき君は、さなぎを見ながら小さな声で言いました。

「放っておいてごめんね。」

昼休みも終わりそうになり、し育しゃの周りで見守るみんなは、少し心配になってきました。さなぎから出てきたオオムラサキが、白い羽をとじたまま少しも動かないからです。

そのときです。オオムラサキが羽を大きく広げて、ゆっくりと飛び立ちました。

「うわあっ！」

みんなの大きなかん声が、し育しゃを包みました。羽を広げたオオムラサキは、十センチ以上の大きさです。

「わあ、きれい。」

「大きいね。」

みんなの喜びの声を聞きながら、たいき君は、さなぎをさわったときのブルツ、ブル、ブルツという感じよくを思い出しました。

「他の七ひきも、早く生まれたらええのにな。」
と、こうた君が言いました。

たいき君はうなずきながら、たくさんのオオムラサキが飛ぶすがたを想ぞうしました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

近松の里をめざして

「尼崎の自まんと言われてもなんも思いつかへんなあ。」

「わたしも。」

学校の帰り道、ぼくの前を歩きながら、けんたとゆみ子が宿題について話しています。社会科の勉強で、ぼくたちのグループは、尼崎の自まんについて調べることになったからです。

いつもなら楽しい帰り道なのに、宿題のせいでちっとも楽しい気分になれません。

「めんどくさいなあ。別に自まんできるとこなんてないのに……。」

そんなことを考えていると、ぼくはだんだんはらが立ってきました。するとふり返ったけんたがぼくを見て、

「明日の土曜日は調べに行かなあかんから、家の手伝いはでけへんかもな。」

と言って、にやりとしました。そういえば、明日は庭の草むしりを手伝うことになっています。とつさに「これで草むしりをしなくてすむ」と考えたぼくは、

「そうか。よし、それならなるべく遠くに出かけよう。でも、どこがいいのか思いつかへんから、帰ってお母さんに聞いてみるわ。」

そう言って、二人と別れました。

土曜日の午後、ぼくたちは「近松の里」をたずねることになりました。お母さんから聞いた「尼崎の自まん」の中で、一番時間がかかりそうな場所を選んだので、思った通り、草むしりはしなくてよいことになりました。

お母さんに書いてもらった地図をもとに、ぼくたちはピクニック気分でバスに乗って出かけました。

近松の里は、近松門左衛門という有名人にちなんで大きな公園や記念館、お寺などがあることはお母さんから聞いたものの、それ以外は何も知りません。車で前を通ったことは何度もありました。特に気にしたこともありません。それは、ゆみ子やけんたも同じでした。

公園に着くと、市のボランティアガイドをしているというおじいさんが、他の子どもたちに説明を始めていました。

「ええとここに来たな。君らもいつしよに聞いたら。」

おじいさんが声をかけてくれたので、ぼくたちもいつしよに見学することになりました。

「これが、近松門左衛門のおはかや。近松門左衛門は江戸時代の人で、しばいを書く作家やったんやで。近松の書くしばいは今でもごつつい人気があつて、何回もえんじられとるから、日本では知らん人はおらんわ。それどころか、外国でも有名や。」

「日本では知らない人はいない」というおじいさんの言葉に、ぼくはなんだかはずかしくなりました。

「なんで、そんな有名な人のおはかがここにあるの？」

ぼくより小さな女の子が、おじいさんにしつ問をしました。

「近松は尼崎が気に入ってな、ここにある廣濟寺というお寺に部屋を作って、そこでなくなるまでおしばいを書いとつたんや。有名な作品がいくつもここでたん生したというこつちやな。」

「知らんかったなあ。」

けんたが感心したように声を上げました。

「そやからこの辺を近松の里と名づけて公園や記念館を建てたんや。」

その後もおじいさんの説明は続き、秋にはここで「近松祭」が行われ、近松の書いた人形じょうりりがえんじられていること、また、ぼくのような小学生もその祭りに参加していることなど、今日一日で、ぼくたちはたくさんを知ることができました。

「おかえり、陽一。近松の里、どないやった？」

家に帰ると、げん関でお父さんがむかえてくれました。ぼくは、今日初めて知ったことを、お父さんとお母さんに話しました。

「ボランティアのガイドさんがいてくれてラッキーやったなあ。今度の社会科のじゅ業では、陽一たちがガイドさんになって、いい発表をせなあかんね。」

「ここにこしながお母さんが言いました。するとお父さんが、今日は大事なことが勉強できたんやな。」

と言ってぼくの頭をやさしくなでてくれました。

夕食のあと、ぼくはさっそく自分の部屋で発表の下書きを始めました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ガスの工事にきたお兄ちゃん

かぞくで大阪のおふるやさんに行きました。

ろてんぶろに入っていたとき、よこにいたお兄さんに、

「ぼく、どこからきたん。」

と聞かれて、

「西宮からきました。」

と答えたら、

「お兄ちゃんなあ、東京からガスの工事に來てるけど、家、だいじょうぶか。」

と聞かれたので、

「うん、だいじょうぶだよ。」

と答えました。すると、お兄さんが、

「ガス、出てる？ 水、出てる？」

と聞いてくれたので、

「ガスが出てない。」

と答えると、

「お兄ちゃんもがんばるから、ぼくもがんばりや。」
とはげましてくれました。

ぼくは、このとき、

「やさしいお兄ちゃんやなあ。」
と思いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

但馬に牛を 前田周助

今から、およそ二百年ほど前の話です。

小代村（今の香美町小代区）の牛かいの家に、周助という、それはそれは牛が好きで男の子がおりました。牛を連れ出して遊ぶことが何よりの楽しみで、朝からばんまで牛の世話をしすごしました。日がくれても帰ってこない周助を心配した家族がさがしに行くと、牛のはらのわきでよりそうようにねむっている、そんなこともしばしばでしたので、村人は周助を「牛かいぼうず」とよびました。

「牛は正直で、本当にかわいいもんだなあ。おいらは牛という時が一番幸せだなあ。」

周助には牛の気持ちが手に取るようにわかりました。牛たちもまた、周助の前ではおとなしく、よく言うことを聞きました。周助にとって牛は心が通じ合う友達でした。

やがて立ばな青年に成長した周助は、うでのいい牛かいになっていました。人一倍の愛じょうをかけて育てている周助の牛は、それは見事な美しさでした。だれにも負けない「良い牛を見極める目」を持っていた周助は、村から村へと良い牛をさがしては買い求め、たん念にし育てて良い子ど

もを産ませました。周助が産ませる子牛のすばらしさには村人もおどろき、特別に名前をつけて「周助牛」とよんでいたほどでした。

しかしその一方で、周助の家族はこまり果てていました。良い牛を見つけると、どうしてもほしくなる周助です。どれだけお金があっても足りません。ふつうであれば、十分にゆう福な生活ができたはずの前田家のし産は、みるみるうちに少なくなっていきました。当時の小代村では、牛は農耕のための道具にすぎませんでした。牛かいは、良い体をした美しい牛よりも、がんじょうで気しようのおとなしい牛を育てればそれでよかったです。家のお金を次から次へと牛にかえてしまいう周助に、家族はもう反発しましたが、周助の良い牛への思いは強くなるばかりでした。

二十六才になった周助は、初めて但馬を出ました。自分が育てた四頭の子牛「周助牛」を大阪の河内牛市場に売りに出してみることにしたのです。何日もかけて牛とともに歩き、おとずれた河内牛市場は、ごった返すような人だかりとけい験したことのない活気にあふれていました。見るものすべてにあつとうされるばかりの周助でしたが、その中で周助牛は、その日一番の高いひょうかを受け、大人気となったのです。

「おい、あれはこの牛だ。すごく美しい牛じゃないか。」

「体はひきしまっているし、肉づきもいい。何よりも顔がりりしいのう。」

「おい、次もまた来てくれよな。ぜっ対だぞ！」

そんな声があちこちから聞こえてきました。うれしさのあまり、周助は飛び上がりたような気分でした。

「子牛がこんなねだんで売れるなら、このまま家族で大阪に引っこせば楽なくらいができるじゃないか。これ以上、良い牛をさがさなくても、このままで十分くらいしていけるんじゃないか。」
そんなことが、牛が売れて有ちよう天になった周助の頭をよぎっていました。

子牛を置いて一人で帰る長い道のりの中で、来るときには気がつかなかった風景に、周助は考えさせられていました。広大な農地や二毛作ができるかんきょうは、但馬にはありません。果てしなく続く金色の田んぼの美しさも、周助のふるさとはありませんでした。

但馬に入るとうげで足を止め、こきょうの方角を見わたしました。そこには高く急な山や面山がたくさんならば、その谷ごとに小さな村々がぼつんぽつんと点のように見えています。いな作にはてきさないその土地が、周助に助けを求めているかのようでした。

「わがふるさとに何ができようか……。この土地に何かがあるというのだ。牛しかないではないか。牛を農ここの道具とし、牛の改良に気がつかず、牛よりもお金の方が大切と言う。とんでもない考えちがいだ。但馬はどこよりも良い天下一の牛を出さねばならない。それしかないのだ。」
冷静さを取りもどした周助は、ゆめからさめたようにつぶやきました。

「わたしが大阪に行くわけにはいかないのだ。」

周助の良い牛を求めて村から村へと歩きまわる日々がふたたび始まりました。

「良い牛を数頭売つてもただそれだけの利えきではないか。わたしの目標は、金もうけをすることではない。わたしはここ小代村に、名牛を後々まで伝え残したいのだ。それには最高の牛を選び出してその血すじをみちびき、ふやさなければならぬ。」

もう何のまよいもありませんでした。周助の強い信念は、家族はもちろん、村人にも伝わり、多くの農家が周助から牛をもらい受けて周助牛をし育てるようになりました。

一八五〇年、ついに周助のすべての思いがこめられた一頭の牛がたん生しました。その牛こそが、今に伝わる但馬の名産、但馬牛のもとであり、松坂牛など数多くの有名な牛のもととなった「周助つる」だったのです。周助はこのとき五十二才。大阪への旅路から、二十五年以上の年月がすぎて

いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

神戸の水

「神戸の水は、世界で一番おいしいって、知ってる？」

坂道をのぼりながら、先生がみんなに聞きました。

「えっ！」

「ほんまに？」

みんなは、おどろいたようにざわめきました。

それは、年に一度の全校写生会の日でした。わたしたちは、新神戸駅の近くにある布引のたきに向かっていました。リュックサックをせ負い、二列になって歩いていました。

「神戸の水はね、食品の国さいコンテストで金賞をとったことがあるのよ。『神戸ウォーター』っていう名前ですごくの人に親しまれているの。」

先生が、少し息を切らしながら話しています。

「神戸には港があるでしょ。そこへやってくる世界中の船乗りさんたちが神戸にやって来ると、この水はおいしいと言って船に持ちこむんですって。赤道をこえるくらいに遠くまで行っても、おいしく飲めるそうよ。船乗りさんたちはみんな、神戸にあこがれていたのね。」

「そんなにすごいんや、神戸の水って。」

神戸の水が有名なことを初めて知ったわたしは、うれしくなって、坂道をのぼるつらさをわすれていました。

「六甲山にはたくさんのお水があるのよ。わき水もたくさん出ていて、わたしたちが家で使う水にも使われているの。」

ふだん、自分が使う水のことなんか考えたことがなかったわたしは、おどろきました。

「へえ、六甲山の水を飲んでたんや。」

坂道をのぼり続けていくと、水しぶきを上げて流れ落ちる水が目に入りました。

「わあ、きれいやなあ。」

「すごいな。」

立ち止まって、そのたきを見上げました。

「ここが、めんたきです。高さは二十メートルくらいね。でもこれでおどろいちゃいけないわよ。」
先生はそう言って、また坂をのぼり出しました。わたしたちもめんたきを横に見ながら、坂をのぼっていきます。と中に、小さなたきが二つありました。どちらもきれいな水が流れ落ちていきます。

さらにのぼっていくと、ゴーという大きな音が聞こえてきました。

「さあ、これがおんたき。このたきが布引のたきとよばれています。高さはめんたきの倍の四十メートルよ。」

先生はたきの上の方を見上げながら、説明してくれました。

「わあ、すごい。そしてきれいな水！」

わたしは、思わず声に出して言いました。すると、先生が、

「そうね、大きいし、水がとつてもきれいなね。だって、神戸の水は世界一だものね。」
と言って、わたしに笑いかけました。

わたしは、町の近くにこんなに美しいたきがあるとは知りませんでした。

「よし、このたきにしよう。」

わたしは布引のたきをかくことにしました。

たきを見上げては筆をとり、画用紙にかいてはまた、たきを見上げます。何度もくり返しているうちに、すっかり布引のたきの風景がわたしの頭の中に入ってしまったようです。

水が流れる様子を表げんするには苦労しましたが、きれいな水だとわかるようにかきました。

水しぶきが上がるところも、うまく仕上がりに、満足のいく絵が完成しました。

「あと十分で集合よ！みんな、そろそろかたづけ始めて。」

先生の声が聞こえました。

周りはいっせいにあとかたづけを始めました。筆をあらって絵の具をしまわなければなりません。筆の絵の具をあらった水は、いろいろな色がまざって、ひどくにごっています。

この水は、ペットボトルに入れて持ち帰り、学校にもどってからすてる約束になっていました。よごれた水を入れたペットボトルは、ずっしりと重く感じます。

「こんな重たいもん、学校まで持って帰るの……。」

あの道のりを考えるとうんざりしました。

「どうせすてるだけやのに。」

ペットボトルをリュックサックに入れようとするわたしの手が止まっていました。

そのときです。

「さすが、うまいなあ。」

ふいの声におどろいてふり返ると、としゆきさんがわたしのかいた絵を見ていました。

「水がごっついきれいやんか。」

としゆきさんはそう言うのと、集合場所へ走っていきました。

わたしは、はっとしました。

「そうや、そうやった。」

わたしは、ペットボトルをしまい、リュックサックをせ負いました。来るときよりも重くて、かたにずっしりと感じます。

帰りは、のぼってきた坂道を下ります。けい流の音がすがしくひびき、きれいな水は、太陽の光を受けて、いつそうまぶしくきらきらとかがやいて見えました。

わたしは歩きながら、自分のかいた絵をもう一度見ました。きれいな水がうまくかけています。

せ中の荷物は重いのに、足取りはなんだか軽くなってくるように感じました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

オサムシくん 手塚治虫

みなさんはゴミムシを知っていますか？

ごみの中にいる黒い小さな虫です。オサムシというのが本当の名前です。

五才から兵庫県宝塚市でくらしたまん画家、手塚治虫さんの「治虫」というペンネームは、このオサムシからとったものだそうです。

手塚さんは子どものころから虫が大好きでした。今の宝塚はたくさんの家やマンションが建っています。手塚さんが子どもの頃は森や畑ばかりの農村でした。手塚さんは石原くんという同級生と、毎日のように虫とりをしていました。近くにこん虫館があり、めずらしい虫をつかまえると、そののひとに名前を聞くこともありました。手塚さんは小学校のころに、およそ三千もの標本をつかったといっています。

小学校三年生のころ、「こん虫図かん」という子ども向けの図かんを買ってもらいました。手塚さんは、その図かんを何度も何度も見たことでしょう。そして「オサムシ」に出会います。

じっくり見ていると、なんだか自分になているように感じます。本人によると、「首が長く、目がぎよろつとしていて、顔つきも悪い。しかも、夜、出歩くのが大好き」と説明されています。「顔

も似てるし、やることもぼくにそっくりや。」

そう思つて「オサムシ」をもじつて「治虫」というペンネームに決めたそうです。

子どもの頃の手塚さんの虫好きは、たいへんなものでした。それは中学校になつても続きます。ちようど十五才のころ手塚さんがかいたこん虫の絵が残っています。これが、見事な出来ばえなのです。とても十五才の少年がかいたとは思えないすばらしさです。手塚さんの絵は、きつと虫をえがくことで上達していったのでしょう。

その後、手塚さんは医学部に進み、お医者さんになります。途中で、まん画家になることを決意します。大好きなまん画を通していろいろなことを人々に伝えたいと思つたのです。このとき立ち上げた会社の名前は「虫プロダクション」。手塚さんはここでも虫にこだわったのです。

その虫プロダクションの小林準治さんによると、手塚さんは、六十才でなくなるまでの間に、七百ほどの作品を残しましたが、そのうち約八十の作品に「こん虫」が登場するそうです。こん虫が主役である作品もたくさんあります。

小林さんは、こう言っています。

「どの作品にも、こん虫に対するやさしさがありません。」

手塚さんの作品には「いのち」をテーマにしたものが数多くありますが、これも手塚さんの昆虫に対するやさしさと、こん虫の短くはかないいのちへの思いがあったからではないでしょうか。手塚さんは大人になっても少年の心をわすれず、多くの人たちに愛されるまん画をかき続けたのです。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

いつまでもわすれない

地しんで てん校した

母の いなかの 射添小学校へ

見たこともない 大雪だった

とても さむかった

でも 安心して ねむることができた

はじめて 学校へ 行った日

体いくかんで あいさつをした

みんな あたたかく むかえてくれた

全校生 百四十一人

三年生は たったの 十七人

みんな とても やさしかった

すぐに なかよくなれた

はじめての バス通学

まんいんの バスにゆられて 二十分

ちよつぴり えんそく気分

はじめての スキー えんそく

みんな すいすい 楽しそう

すべれないのは わたしだけ

先生が つきつきりで 教えてくれた

少し すべれるようになった

「やったあ」と思った

神戸に帰る日が 来た

射添小学校を はなれなくなかった

地しんを わすれるほど 楽しかったから

三年生から もらった 『思い出のつづり』

校長先生からの 手紙

たんにんの 先生からの 手紙

ほかの 学年の 人からの 手紙

みんな 大事に しまっている

今でも ときどき 思い出す

楽しく かよった 射添小学校

なかよく あそんだ みんなの顔

雪に うまりそうだった 村岡の町

わたしは いつまでも わすれない

愛のひと 野口ゆか

「かーごめ、かごめ、かーごのなーかのとーりーはー。」
子どもたちの明るい笑い声が園庭にひびきます。どの子も笑顔で、目はいきいきとかがやいています。

園庭で遊ぶ子どもたちの様子を、あたたかく見守っている女の人がいきました。めぐまれない家庭の子どもたちのために、ほ育園をひらいた人物、野口ゆかです。

ゆかは、一八六六（慶応二）年、今の姫路に生まれ、やさしい両親のもとで大きな愛じょうを受けて育ちました。本が好きでゆかのために、お父さんは本を借りてきては、読ませてくれました。ほがらかなお母さんのもとへは、多くの人たちが集まってきました。ゆかの周りはいつも明るい笑顔があふれていました。

こうして両親の愛に包まれながら、ゆかはかしこく思いやりのある子に育っていきました。

ある日、ゆかは、近くに住むおばあさんが、炭がなくてこまっていることを知りました。ガスも

電気もない時代です。まきや炭で火を起こし、夜はろうそくをともしてくらしていました。

「おばあちゃん、この炭を使ってちょうだい。」

ゆかはそのうちの炭を持っていき、あげてしまいました。

「ありがとう、ゆかちゃん。おかげでご飯をたたくことができるよ。」

おばあさんがよろこぶすがたを見て、ゆかとはとてもうれしくなり、心はずませて家に帰りました。

しかし、家では、お母さんがこまった顔で何かをさがしていました。

「炭がなくなっているのよ。ゆかちゃん、知らない？」

ゆかは「あつ。」と思いました。自分の家のことを考えていなかったのです。ゆかは、近所のおばあさんにあげてしまったことを正直に話しました。お母さんは、そんなゆかをしかることはありませんでした。

またある日は、となりの家のお手伝いさんが、足がいたくて歩けなくなっていることを知りました。行ってみると、足がただれ、すり切れています。あかぎれだとわかったゆかは、

「いいものがあるから、待っていてください。」

と言って山へ行き、すぎの油を集めてきました。いつかおかあさんから聞いた「すぎの油があかぎれにきく」という話を思い出したからです。小さな子どもが、すぎの油を集めるのは大変なことだ

した。それでも、こまっている人のことを思うと、じっとしていられないゆかでした。

そんなゆかが、大きな悲しみにおそわれたのは、一九才のときでした。心のささえだった両親が相次いでなくなってしまったのです。大切な家族を失ったゆかの悲しみは、はかりしれないものでした。

「お父さん、お母さん、これからわたしはどうしたらいいの？」

いく日もさびしさとぜつ望の中にいたゆかでしたが、ある日、いつもお父さんが言っていた「子どもはたからだ」という言葉を思い出しました。

「そうだ、お父さんとお母さんがわたしの力になってくれたように、今度はわたしが子どもたちの力になろう。」

その決意が、ゆかを悲しみのふちから立ち上がらせました。

ゆかは東京へ出て、ほ育園の先生になりました。しかしそこは、ゆたかな家庭の子どもたちだけが集まる、かぎられた場所でした。町には食べるものがなく、おなかをすかせてない子どもがいます。当時は、ほ育園に行きたくても行けない子どもたちがたくさんいたのです。ゆかは心を

いためていました。

「めぐまれない子どもたちが通えるほ育園はないものだろうか……。」

ゆかの心の中で、「子どもはたからだ」と言ったお父さんの言葉がよみがえってきました。

「わたしがつくるう。めぐまれない子どもたちのために、これからわたしのすべてをささげよう。」

やがて、ゆかによって新しいほ育園が作られました。そこは、ゆかの生き方そのものをえがき出したようなあたたかい場所になりました。

「かーごめ、かごめ、かーごのなーかのとーりーはー。」

今日も子どもたちの笑い声が園庭にひびきます。

「先生、いっしょにかごめしよう。」

子どもたちに手を引かれたゆかは、笑顔でかごめの輪の中に入っていました。

こうして、日本で最初の、めぐまれない子どもたちのためのほ育園がたん生したのです。

そろばんづくり 小野のそろばん

「かず、何やっとなのや！」

お母さんの声がかミナリのようにひびいて、体がビクツとふるえた。同時に、そろばんをひっくり返してテーブルの上でゴロゴロ動かしているぼくの手も、止まった。

「おもちゃの車みたいに転がして。これはすごいそろばんやから、大事に使わなあかんで言うたやろ！」

二発目のカミナリが落ちた。ぼくは負けまいと言い返す。

「でも、みんなこうやって遊んどったけど、こわれへんかったで。」

「なに言うてんの。そろばん玉にきずがつくし、動きが悪なるんや。そろばんはデリケートな道具なんやで。作るのもむずかしいこと、知らんのやろ。」

ずいぶん大げさだなあと、ぼくは思った。

「ほんま？そろばんなんて、かん単に機械で作れそうやんか。」

三発目が来るかなと思ったが、お母さんは「はあ」とため息をついて、それ以上は何も言っていなかった。

次の日、お母さんは学校から帰るぼくを待ちかまえていた。

「ついておいで。」

と言って、ぼくを家の外へ連れ出した。

お母さんの手には、ぼくが昨日おもちゃにしていたそろばんがある。このそろばん、どうするんやろ、どこへ行くんやろと思いつながら、また何か言ったらおこられそうなので、口には出さずについていった。お母さんはぼくの前をだまって歩いていった。ぼくもだまってその後についていった。

「さあ、着いたよ。」

そう言って、お母さんが立ち止まったのは、ふ通の家の前だった。たしかに「そろばん」と書かれたかん板がある。

「こんなところでそろばんを作っているの。」

ぼくは、少しおどろいた。そろばんは、大きな工場の中で機械で作られているのだとばかり思っていたからだ。

お母さんは、おくにある倉庫のような小さな建物へ向かった。ぼくも、ついていった。

そこは、想ぞうしていたそろばん工場とは全くちがっていた。古い道具がゆかやかべにびっしりならんでいる。だけど、機械らしきものは一つもない。

「トントントン、カンカンカン。」

その音のする方を見ると、おじさんが一人、すわってそろばんのわくを金づちだけで組み立てていた。きびしい顔をしている。部屋の空気がピンとはりつめていようだ。

「かず、こちらは宮本一廣さん。そろばんを組み立てるしよく人中のしよく人やで。」

宮本さんは小野市で作られている播州そろばんの伝とう工芸士で、五十年以上もそろばんを作り続けている人だとお母さんは教えてくれた。

「すごいけど、五十年も同じもんを作ったたらあきそうや。」

思わず言ってしまう、「しまった」と思っていると、宮本さんはにっこり笑って顔を上げた。

「ほんまやな。でもおっちゃんはな、毎日、ちがうそろばんを作つとる気分なんやで。玉とひごの相しようも、一つ一つちがうしな。」

そう言つて、またわくをトントントンと金づちでたたいた。

宮本さんは、機械を使わずにほとんど手でそろばんを組み立てているという。指先の感覚だけで玉とひごの0.1ミリ単位の調整をしているそうだ。ぼくはおどろいて、

「信じられへんわ。」

とつぶやいた。

「気をぬかれへんよ。毎日考えて、工夫して一生けん命努力せなあかん。一人でも多くの人に使いやすいと思ってもらえるように、気持ちをこめて作ってんねんで。」

宮本さんの話をくわしく聞いているうちに、ぼくは昨日の自分を思い出して何とも言えない気持ちになった。

「宮本さん……、すみませんが、このそろばんの玉とひごを調節してやってもらえませんか。」

お母さんは、すまなそうにそろばんを差し出した。ぼくはうつむいたまま、顔を上げられないでいると、

「おっ、まだわしのそろばんを使ってくれてたんや。」

宮本さんのはじけるような明るい声が聞こえた。見ると、宮本さんがうれしそうに笑っている。

「そうですよ！わたしが小学生のときにいただいたあのそろばんですよ。」

そろばん作りにきょう味をもっていたお母さんに、宮本さんは自分が作ったそろばんを特別にあげたのだという。

その後、お母さんは高校生の時、そろばんの全国大会で宮本さんとぐう然にさい会した。

「あのとき、あなたのお母ちゃんから、『おっちゃん、そろばん使いやすいわ。十年間ずっと使ってる』と言うてもらたんや。ものすごくうれしかったんやで。」

そう言うと、宮本さんの顔は、しわと笑みでくちやくちやになった。

お母さんは一度ぼくの方を見て、そしてしみじみと宮本さんに語りかけた。

「このそろばんには、宮本さんの心がぎっしりつまっているようで……。この子にもずっと使ってほしいですよ。他のそろばんには、かえられないですよ。」

お母さんが宮本さんに話すのを聞きながら、ぼくは、昨日転がしていたそろばんを見つめた。

急に手に取ってみたくなくなった。最初は右手で持ち上げ、すぐに両手で持ち直した。おっちゃんのそろばんが、ずっしりと重く感じた。

「おっちゃんのそろばんはな、玉の動きと止まりが最高にいいんや。」

しゅう理がすんでもどつてきたそろばんを見ながら、お母さんが言った。

ぼくには、その意味がよくわからなかったけれど、そろばんをはじいて、そんなことを感じられるようになりたいなと思った。

玉をゆつくりとはじいてみた。

パチツ、といい音がした。

最高のそろばんを作る宮本のおっちゃんと、それを大事にするお母さんは、二人とも最高にかっこいいなと思った。

風の学校 中田正一

一九八六（昭和六十一）年、四十度はあろうかという暑さの中、西アフリカを走る国さい列車に中田正一さんは乗っていました。セネガルの首都ダカルとマリの首都バマコを結ぶその列車には、クーラーもなければせん風機ありません。食堂も車内はん売もなく、ダカルで用意した水は、残り少なくなっています。水をほ給しようにも、小さな駅では安心して飲める水道などありません。目的地のバマコには、あと一日、走り続けなければたどりつきません。

「水か……。まだまだ……。」

開け放ったまどからふきこむ熱風を浴びながら、中田さんは、これまでの歩み続けてきた道を、思い起こしていました。

中田さんは、一九〇六（明治三十九）年、淡路島に生まれました。大学を卒業して国の役所に入った中田さんは、農業の方法をよりよくする仕事に長年たずさわりました。中田さんが海外の農業とかかわりをもったのは、一九六三（昭和三十八）年、アフガニスタンで農業ぎじゅつの指どうをしたのまれたことに始まります。

げん地では、近くに川があるのに、畑に水をくみ上げることができないために、作物がかれてしまつことを何度も目にしました。中田さんは、水をかくほする方法を伝えなくてはならないことを思い知らされました。

アフガニスタンから帰ると、中田さんは、い戸のほり方や、風車を用いて水をくみ上げる方法など、日本の古いぎじゅつを研究しました。このような古くから伝わるぎじゅつは、それぞれの土地や風土に合った農業を行うときに必ず役に立つと考えたからです。

「これは、げん地の人の役に立つ。」

中田さんは海外でのけい験からかく信じていました。

そして、もう一つ大切なものがあると中田さんは言っています。

中田さんは、一九七五（昭和五十）年から七年間、せい府の農業協力プロジェクトのチームリーダーとしてバン格拉デシュに行きました。

そこで中田さんがしたことは、今まで研究してきたことを教えるだけではありませんでした。中田さんが大切にしたことは、げん地の人々といっしょに食べ、いっしょにねて、信らい関係をきず

くということでした。

い戸が完成すると、その周りは水くみにやってくる村の人たちでにぎやかになります。その様子を見て、いっしょに働いたげん地の人と両手であく手する中田さんでした。

「えん助は人である」

中田さんは、そう信じていました。バングラデシュで中田さんに学んだげん地の人たちは、みんな中田さんを信らいし、愛していました。

バングラデシュから帰ると、中田さんは、「風の学校」をつくりました。海外に出かけ、農業ぎじゅつをおしてげん地の人たちの役に立ちたいという人を育てる学校です。「風の学校」に集まってきた人たちに中田さんは、

「自分から進んで学ぼうという気持ちと、何事もやってみようという思いがなくてはだめだ。」
と言いつけました。そして、

「何よりも大切なのは、人に対する思いやりだ。」

とも、強くうったえました。農業のぎじゅつを学ぶ前に、一人の人間としての力強くあたたかい生き方を求めたのでしよう。人に対する思いやりがなければ、ぎじゅつを伝えることなどできないと考えていたのです。それは、中田さんが今まで自分でやってきたことでした。

「風の学校」で心をきたえられ、農業にぎじゅつを身につけた人たちは、げん地の人たちと力を合わせてその土地に合った農業を開発するために世界の国々に旅立っています。中田さんの考えが、

「風の学校」で学んだ人たちによって世界中に広まっているのです。

「しつかりやってこいよ。たのんだぞ。」

中田さんは、たのしくなったかれらのせ中を見送るのでした。

中田さんは、のどのかわきにたえながら、西アフリカの地平線にせずむ夕日を見ていました。

「まだまだ、わたしたちには、やらなければならぬことがたくさんある。ここもそうだ。」

バマコに着いたら、今までやってきたように、げん地の人々と農業のぎじゅつを土地に根付かせる仕事が続いています。

このとき中田さんは八十才。熱い思いは、まだまだかれています。

ぼくたちができること

ぼくの家族は、一年一組の教室で、三十四人の人たちといっしょにひなん生活をしている。着るもの食べるものもあまりないけど、みんなで分けあって協力している。

ぼくも食べ物をもらいに行っている。初めの三、四日はあつという間にすぎたけど、その後、ぼくはこれでいいのかなと思うようになってきた。小学校には、たくさんの子どもがひなんしてきているが、みんなが集まってすることがない。小さい子は、ぼくら以上に大変だろうと思って、ぼくたちにできることはないか考えた。

そこで、先生に、

「紙しばいをしようと思うんですけど、どうですか。」
と聞いた。

「自分たちでやろうと思うことは、どんどんやれ。」
と言われたので、小さい子を集めて、今やっている。

毎日、ほんの二十分くらいだけど、三才から低学年くらいの子が集まって、真けんに聞いたり、おもしろいところでわらったりするすがたを見ていると、ぼくたちもやってよかったと思う。

いつか必ず役に立つ 大上宇市

「どかんかい！じゃまになる。」

村人のど鳴り声で、宇市ははっとわれに返りました。あぜ道にはりつくようにはらばいになっていた宇市を、荷車をおす村人がけわしい表じょうで見下ろしていました。宇市はあわてて立ち上がり、道をゆずりました。

「この変わりもんが！」

村人が、すれちがいざまにはきすてた言葉も、まるで聞こえなかったかのように、宇市はふたたび体を低くし、熱心に観察を続けました。

宇市は、たつの市新宮町の山あいにある、小さな村に生まれました。病弱で、満足な薬代も得られないまま、しい家庭に育った宇市は、野山に育つ薬草をさがして歩かなければなりません。薬草をせんじて飲むことが、自分の健康を守る手立てだったので。宇市は毎日のように野山を歩いては、そこに育つさまざまな植物をさい集し、事細かに観察するようになりました。

「これは、何という名前だろう。何の仲間だろう。」

じっくり観察してみると、同じように見えてもそこにはびみょうなちがいがあり、たくさんの種類があることに気がつきます。宇市は、調べたいことがあると、参考になる本を遠くの村から借りてきてはむ中になって読みました。そして、その本を一文一文字、丁寧に書き写し、覚えていきましました。

宇市のきょう味は、植物だけではなくこん虫にも広がっていきました。やがて研究心に火がついた宇市は、中国・近畿地方のすみずみまでさい集や観察に歩いてまわるようになりました。調べたことは、絵やせつ明を入れてくわしく書き残していきました。しかし、学歴もなく、かた書きもない宇市が、いくら研究をしても、かん単にはみとめてもらえません。それでも宇市は、「世の中にはこんなにあくさんの知られていない植物があり、こん虫がいるのだ。自分の研究は、いつか必ず役に立つ」と信じて、昼はさい集と観察を、夜はねる間をおしんで調べたことを書き続けました。

「いなか者の考えだ」と相手にされない研究を、昼夜を問わず続ける宇市を、村人は「変わり者」「ひま人」などとよび、冷たい目で見ていました。そのころの宇市は家庭をもち、子どもの父親でもありながら、お金にならない研究を続けていたのです。宇市のすがたが、きみようにうつったのは無理ありません。

ある日、宇市の息子たちが、思いつめたような表じょうで宇市の前に立ちふさがり、さげびまし

た。

「おとうちゃんは、なんで家の仕事をしてくれへんのや！」

「研究ばかりで、なんにも見えんのやから！」

子どもながらに小さな心をいためていたのでしょう。ぼろぼろとなみだを流しながらうったえる息子たちの前で、宇市は何も言えず、ただだまっているしかありませんでした。

三十六才の時、転機がおとずれました。宇市が発見した「コヤスノキ」が、植物学者牧野富太郎氏によって世界の植物学会に発表され、大上宇市の研究が多くの人たちの間でみとめられるようになったのです。

けれども、宇市自身は、「自分の研究が村の役に立たないか」といつも考えていました。そこで、これまでの研究を生かし、池の工事や道づくり、新しい農業の仕方など次々にてい案し、村のためにけん命に働きました。変人あつかいしていた村人も、次第に宇市をみとめるようになり、その指どうを受け入れるようになっていきました。

しかし、毎年のように続く夏の日照りには勝てず、村の生活はいつこつに楽にはなりません。

「もう自分の力ではどうにもならない……。」

あきらめかけていたとき、宇市の心にうかんだのは、む中になって観察を続けたわかき日の思い、

研究に自分自身をかり立てた、あの思いでした。

自分の研究は、いつか必ず役に立つ

苦のうちの中、研究を続けた宇市は、やがて一つの結ろんをみちびき出しました。

「そうだ。無理をしていねを育てなくてもいいのだ。この土地にあつた植物があるではないか！」
いな作にたよっていた村が、のちに揖保郡（今のたつの市）一のまゆの生産地へと発てんしたのは、このときの宇市の指どうによるものでした。くわを植えてかいこを育てるといふ、村の自然を生かした産業が、宇市によって生み出されたのです。

宇市は、高く積み上げられた書物の山に囲まれながら、活気づく村に目を細めるのでした。

一九四一（昭和一六）年、宇市はこの世を去りましたが、かれが残した数千さつのし料は、地いきに受けつがれ、今も大切に保管されています。宇市がねむるたつの市新宮町の天王山のふもとには、このい大なる博物学者「大上宇市」をたたえる石ひが立てられ、宇市とともにこの地を見守っています。

ぼくの町のたからもの 平之荘能舞台

ぼくは、半年ほど前に加古川市のこの町へやってきた転校生だ。

前に住んでいたところにくらべると田んぼや畑ばかりで、初めはびっくりしたけれど、新しい友達もでき、学校にもなれてきた。

二月の、ときどき雪がふる寒い日だった。ぼくたちは、六年生の狂言発表会を見学するため、学校の近くの平之荘神社へ行った。

「寒い。早く学校へ帰りたい。狂言なんて見たことも、聞いたこともないし。」
ぼくはそう思っていた。

神社には、全校生とお父さんやお母さんたち、そして地いきの人々がたくさん来ていた。中には加古川市以外の遠いところからのお客さんもいて、三百人ほどが集まっていた。

六年生が狂言の練習をしているのは知っていたけど、目の前で見るのは初めてだった。

開始前に、宮司さんが話をしてくれた。それによると、平之荘神社は八百年ぐらい前の鎌倉時代から続く古い神社だという。その神社の能ぶたいを使って、十年ほど前からぼくたちの小学校の六年生が毎年、狂言発表会をしているそうだ。そして、

「狂言は昔の笑い話をおしばいにしたようなものです。楽しんでくださいね。」
と言った。

「こんなに寒くちゃ楽しめないよ。早く終わってくれ。」

ぼくは心の中でさげんでいた。

不思議なのは、ぼくのクラスの仲間たちが、文くも言わずに、なんだか楽しそうに待っていることだった。だれも寒いとは言わないし、帰りたいなんて言う人もいない。だれかが言い出せば、ぼくもそれにさん成しようと思っていたのに、みんなまじめに宮司さんの話を聞き、狂言が始まるのを待っていた。

宮司さんが下がると、六年生があいさつに立った。

「ぼくたちは、一年生のときから六年生の狂言を見てきました。だから、六年生になったら、この能ぶたいで狂言の発表会をたくさんの人たちに見てもらおうと練習をがんばってきました。伝とうのあるこの能ぶたいで、狂言の発表をするぼくたちのすがたを、どうぞごらんください。」

六年生は、ずいぶん真けんだなと思った。みんなも能ぶたいの方へ集中している。

なんだかぼくだけが、取り残されているみたいに感じた。

いよいよ狂言が始まった。

はかまに手作りのかみしもをつけた六年生が、真けんな表じょうで能ぶたいに登場した。地いきの人々が、いつせいにカメラをかまえる。けいだいはシーンと静まりかえった。見ているほうも、みんな真けんだ。

ぶたいの上では大きな声がひびいた。昔の言葉づかいと長いせりふだけれど、六年生は、役になりきり、堂々としたえんぎをしている。

おもしろい動きとせりふに、ぼくも思わず笑ってしまった。たしかにおもしろい。

けいだいには笑顔があふれている。

そして場面が変わるごとにおくられる、大きなはく手。

そこは、えんじる側の六年生と、見ている側の地いきの人々が、一つになったような不思議な空間だった。

あつという間の、二時間が終わった。

最後に六年生があいさつをしたときには、けいだいがふたたび大きなはく手に包まれた。

ぼくは寒さをわすれ、いつの間にかこの不思議な空間の一員になっていた。むねをはって、堂々

と能ぶたいに立っている六年生は、とてもかっこよかった。そして、ぼくも、あの能ぶたいに立ちたいと思った。

「はやく、六年生になりたいね。」

と、だれかが言った。

ぼくもみんなといっしょに、うなずいた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ぼくは一人じゃない

地しんが起きたとき、暗やみの中で妹と弟は泣いていた。ぼくは、たおれた家具からぬけ出せなくてあせっていた。お父さんは一番に起き上がり、ひなんのためにドアを開け、大声で子ども三人の名前をよんでいた。お母さんは、たおれてくる家具や落ちてくる電灯から弟をだきかかえて守りながら、妹に、

「だいじょうぶよ。」

と声をかけていた。本当は、お母さんもこわかったんだろうけど、ぼくたちがこれ以上不安に思わないようにがんばっていたのだと、後でわかった。それは、次の日、おばあちゃんの家で電話が通じた時、泣いていたからだ。

お父さんは、ぼくを助けだしてくれた後、家族を一階まで連れ出し、

「まだ寒い。外にいとだめだ。」

と言って、よしんがいつ来るかわからない中を、また十二階まで車のキーを取りに上がった。今度地しんが来たら、この建物がたおれるんじゃないかと思うと、お父さんのすがたが見えるまでごく心配だった。

その後も、お母さんは食料集めに走りまわり、お父さんは身のまわりの物を取りに行くなどして、一日が、あっと言う間に過ぎていった。

そして、両親がいそがしくしている間、妹と弟が、ずっとぼくのそばにいることに気がついた。いつもはけんかをするけれど、妹は、夜もぼくの手をにぎってねる日が続いた。妹や弟がぼくをたよりにしていると思ったとき、家族の大切さがわかった気がした。

それから、二週間ほどたったころ、ぼくたちは、おじいちゃんの家に行った。

そこで、おじいちゃんもおばあちゃんも、おじちゃんもいとこも、みんなぼくたちのすがたを見て、安心してくれた。おじいちゃんは、

「ガスも水道も出るようになるまで帰るな。」

と言ってくれた。ここにも、ぼくたちのことを心配してくれる人がいるんだと思った。

学校がさい開すると、先生や友達がいた。

この地しんによって、ぼくには、たくさんの人が、いつもそばにいて、知ることができた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

こじは山田錦のふるさと

藤川禎次

このところ、ちらほらと見かける、変な旗。田んぼのわきに、ぼつりぼつりと立てられています。

「お祭りは今ごろないし、なんやろ。」

不思議に思っていた由紀は、夕食のとき、おじいちゃんに聞いてみることにしました。

「おじいちゃん、田んぼのあぜに立つとる旗があつたんやけど、あれ何？」

お米を作っているおじいちゃんは、笑いながら、

「ああ、あれか。『契約田』とか『栽培田』とか書いてあつたやろ。あれはお酒をつくる会

社の名前や。」

と、教えてくれました。

「なんでお酒の会社が、田んぼに旗を立てなあかんの？」

「うちのお酒は、この田んぼのお米からつくりますという印や。」

「へえ、あそこのお米で、お酒をつくるんや。」

「この辺りでとれるお米は、酒米というてな。えらいひょうばんがええんや。だから、お酒をつくつとる会社が農家とけい約するんや。ほんで話がまとまったら、あの旗を立てるんや。」

「ふーん、そうなんや。」

由紀は、初めて聞く話にしきょう味をもちました。

「田んぼなんかどこにでもあるのに、なんでわざわざここなんやろ。」

次の日、由紀は、先生におじいちゃんから聞いた話をしました。すると、先生は、

「それは、いいことを教えてもらったね。一学期になったら社会科で農家の仕事の勉強をするから、調べてみるとおもしろいね。」

と、アドバイスをしてくれました。

二学期になりました。由紀が旗を見つけた六月には、まだ短かったいねは、たくましく青々と育っていました。

由紀たちのグループでは、由紀がてい案して「酒米」について調べることになりました。

田んぼに行ったり、農家の人に話を聞いたり、グループで手分けをして調べてみると、その米は「山田錦」とよばれる地いきの特産物であることがわかりました。

さらに調べると、山田錦は、日本の酒米を代表する品種であることもわかりました。

「へえ、すごいやん。」

グループのみんなは自分たちの住む地いきで、そんなに有名なお米が作られていることにおどろきました。そして、この地いきは酒米のさいばいに向いていて、最も品しつの高い山田錦がしゅうかくされていることもわかってきました。

中でも由紀たちがきょう味をもったのは、そのすばらしい酒米の生みの親が、自分たちと同じ加東市の出身の「藤川禎次」という人だということです。グループでは、その生みの親について調べてみようということになり、由紀は酒米のことをよく知っているおじいちゃんに、取材することにしました。

その日の夕方、由紀はおじいちゃんに藤川さんのことを聞いてみました。

「ほう、よう調べたな。藤川さんまでたどりついたのは、さすがや。」

と、おじいちゃんがほめてくれました。そして山田錦たん生に関わった藤川さんの話をしてくれたのです。

藤川禎次さんは、今から百年以上前の一八九五（明治二十八）年に、加東市高岡（当時は加東郡滝野村）の農家に生まれたそうです。ところが、小さい時にお父さんもお母さんもなくなってしま

い、藤川さんは親せきの家で育てられることになりました。

「生まれた家とちがって、子どもながらに気をつかったり、米づくりの手伝いもしたりで、きつかったと思うで。」

と、おじいちゃんは言いました。

大人になって農業関係の仕事についた藤川さんは、加東市にあった酒米試験地の主にん研究員になりました。そこで、新しい酒米を完成させるという大役を引き受け、何年も何年も、昼夜を問わず、必死に研究しました。試験する田んぼまで、かた道二十キロメートルもある道のりを自転車で行き来していたそうです。

そして、ようやく完成した酒米は、一九三六（昭和十一）年、兵庫県によって、「山田錦」という名前がつけられました。さらに県のしょうれい品種に指定されたのです。

「そりゃ、新しい品種を開発するのに一年や二年では無理やな。失敗にくじけんと、ねばり強う研究を続けたからこそ、すごい酒米を完成させることができたんや。」

おじいちゃんは、わたしに話すというより、一人語りのようにしみじみと話をしています。

「ところがな、戦争が近づいていた時代で、酒米はぜいたく品やと言われた。藤川さんが苦労して開発した山田錦は、結局、その当時は広まらんかった。」

おじいちゃんは、急にさみしそうな顔をしました。

「山田錦のよさがみとめられて、ゆうしゅうな酒米として全国的に有名になったのは、戦争が終わってからや。でもそのとき、もう藤川さんは、おらんかった。五十一才というわかさでなくなっ
たんや。酒米の開発で命をけずってしもたんかもなあ。」

そう言うと、おじいちゃんは、まどごしに広がる一面の山田錦をじっと見つめました。

「けど、藤川さんは、なんでそんなにしてまで、開発を続けたんやろか？」

由紀がぼつりとつぶやいた言葉に、

「子どものころ、米作りの手伝いで苦労して大きくなった人やから、苦しい生活の中、米作りにはげ
む地いきの人たちのくらしを少しでも楽にしたいと思ったんやろな。ほんまに地いきのことを考
えてはったんやな。」

おじいちゃんは、それだけ答えると、だまつて席を立ちました。

由紀は、夕日に照らされてあかね色にかがやいている山田錦が、藤川さんの思いをを語りかけて
いるようで、じつとまどの外を見つめていました。

その夜、由紀は、調べたことをノートにまとめました。

「自分たちの住んでいるこの地いきは、山田錦という有名な酒米の産地です。そのことは、地いきの自まんです。」

ここまで、書いたとき、ふと、夕方に見た景色と、おじいちゃん言葉を思い出しました。「でも、地いきの一番の自まんは、藤川さんです。」

由紀は、大きくうなずきながら、続きを書きはじめました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複製して使用することを禁止します。

わたしの雪彦山

あい子は、家から遠くに見えるその山を、小さいころから不思議な山だと思っていました。てっぺんの方は、岩でごつごつしていて、何かこわいようにも感じていました。

「あそのこの山は、山ぶしたちがこもってしゅ行をする」と、おじいちゃんが言ったことがありました。それからあい子は、きつと近よってはいけない山なんだと置いていたのです。

ある日、おじいちゃんが、

「あい子、今度の休みの日に雪彦山に行ってみよか。きれいな花や草がぎょうさん見られるで。」と、話しかけてきました。

「でも、そこは山ぶしさんしか行ったらあかんのやる?」

「何を言うてるんや。」

おじいちゃんは、にっこり笑ってあい子のとなりにすわり、話してくれました。

「雪彦山はな、岩が角みたいにとんがっとなるやる。めずらしいから日本百景にも選ばれとなるんやで。昔の人は、神様がおるよう見えたんやるな。それで、山ぶしがしゅ行するようになったんや。」

「でも、岩山みたいやけど、花がさいてるの?」

「おお、そりゃ行ってみたらわかるわ。」

「あつ、あそこにピンク色の花がさいてる！」

休みの日に、あの子はおじいちゃんと雪彦山へやってきました。近くまでくると、思っていたよりも高い山だとわかりました。岩が突き出たようなちよう上もよく見えます。あの子は、おじいちゃんと登山道を歩いていました。

「アケボノツツジやな。山に春がきたと教えてくれる花や。」

「おじいちゃん、こっちの木はえだが三本に分かれてるよ。」

「それは、ミツマタ言っや。その木から和紙ができるんや。」

家でもたくさんの草花を育てているおじいちゃんは、植物のことは何でも知っています。あの子に教えてくれるときは、とても生き生きとした顔をしています。

「これはオチフジやな。」

おじいちゃんは、地面にはり付くようにさいている小さくてかわいい花を指差して言いました。

「かわいい。これ、お母さんに見せたい。」

あの子がその小さな花に手をのばした時でした。

「あかん！」

おじいちゃんの大きな声がしました。

「あかん、あい子。取ったらあかん。」

あい子はびっくりして手を止め、おじいちゃんの方をふり向きました。

「ええか、自然に生えているものは取ったらあかん。このオチフジは、この辺りでしか見られん花なんや。オチフジだけやない。この山にやってくる人が、いろいろな草花を、めずらしいといって根っこからぬいて持って行ってしまふことが、よくあるんや。だから、どんどん花の種類も少なくなつてしまつた。」

おじいちゃんはさみしそうな顔をして、そう言いました。

「ごめんなさい。」

あい子は立ち上がりながら、小さな声であやまりました。

おじいちゃんとあい子は、また道を歩き出しました。

「ホーホケキョ。」

「キツチヨ、キツチヨ、ピピピ、ピピピピピピ……。」

鳥の鳴き声がします。

「おっ、ウグイスとミソサザイが鳴いとるな。鳥もたくさんおるで。それに、この山には、シカ、クマ、タヌキ、ウサギ、サルもおるんや。花だけやない、生き物がたくさんおるんや。」

おじいちゃんが空を見上げました。小さな鳥が木から飛び立っていきました。

あい子も、青い空を見上げ、鳥の声を聞きながら、大きく息をすってみました。これが自然のにおいなんだと思いました。

「でもな、わしらが子どもころは、もっともつといるいな草木がしげつとつてな、動物たちもぎょうさんおったんや。山に食べ物がたくさんあったからやるな。今では、すっかりへつてしもたがな。」

おじいちゃんが、昔のことをなつかしそうに言いました。

あい子は、シカやウサギやタヌキが、山を走り回る様子を思いうかべました。

たくさん草花、鳥の鳴き声、そしてどこかにいる動物たち……。あい子にとっては、やはり雪彦山は自然がいっぱいあった山だと思いました。

「わたしが大きくなって、花も木も鳥も動物もたくさんいる今のままの山にしたいな。」

「おお、よう言うた。そうや、あい子たちが守ってくれへんと、生き物たちがくらすへん山になつ

てしまうからな。」

おじいちゃんはそう言っつて、うっすらとうかんだひたいのあせをタオルでふきました。

あい子は、おじいちゃんが見上げている山のとっぺんをいっしょに見上げました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。